

ビ

ー

だ

ま

## ビーだまのように、キラリと光る一冊を

2019年1月～12月に発行された本の中から、とくにおすすめの本を紹介します

<編集・発行> 富山市立図書館 富山市西町5番1号  
電話 076-461-3200

令和2年4月23日発行(年1回発行)

### moja (もじゃ)

吉田桃子／著 講談社

理沙は、毛深い自分の体が嫌でたまらない。夏でも肌を見せないように長袖とタイツで完全防備し、思い切って「エステへ脱毛に行きたい」と相談した母には笑い飛ばされる。

不審に感じた友人の希空<sup>のあ</sup>から「隠し事をしている」と責められた理沙は、本当のことを言えず大ゲンカをしてしまう。絶交を覚悟し体毛の悩みをメールした休み明け。希空から自分もコンプレックスを隠していたことを打ち明けられる。

画像なし

### この海を越えれば、わたしは

ローレン・ウォーク／作 中井はるの／訳 中井川玲子／訳 さ・え・ら書房



生まれてすぐ小舟に乗せられたクロウは、ある島にたどり着いた。父親代わりのオッシュに愛情をかけられ育ったが、地域の人々からは避けられている。かつてハンセン病患者の療養所があった、ペニキース島から流されたのではと疑われているからだ。それでもクロウの中では、自分のルーツを知りたいという思いが日増しに高まっていく。その頃無人のペニキース島では、<sup>よこしま</sup>邪な目的で地面が掘り起こされていた。

画像なし

地味な小学生だった葉子は、中学に入学して以来、髪型やコンタクトで外見を変え、今や〈日向〉のグループで過ごしていた。けれど体育祭の応援旗係でかつての親友だったしおりと一緒にになり、二人で絵を描いていたころを思い出していく。

一方、同じクラスの大地は、成績が常に学年二位であることを面白く思っていなかった。それは偶然知った学年トップが貧乏で影が薄い転校生だったからだ。

## ゴースト

ジェイソン・レノルズ／作 ないとうふみこ／訳 小峰書店

キャッスルは、陸上チームの練習に飛び入り参加して、自分の足の速さを見せつける。監督にスカウトされるものの、家に余裕がないため、陸上用のスニーカーを買うことができない。ふらっと入ったスポーツ用品店でかっこいいスニーカーを見たキャッスルは、こっそり持ち帰ってしまう。

新人食事会の席で秘密を話した者から食べていいと言われた時、まっ先に頭にうかんだのはスニーカーのことだった。



## 思いはいのり、言葉はつばさ

まはら三桃／著 まめふく／装画 アリス館



女性はてん足をし、男性しか読み書きを習えなかった時代。結婚前の少女たちは、織物や刺しゅうの他に女性だけに受け継がれる文字をひそかに習っていた。やがて顔も知らない人に労働力として嫁いでいく少女たち。チャオミンは姉妹の契りを結んだシューインにあてて、覚えてたの文字で思いのたけをつづった。書くことが心を自由にすると信じて。

※てん足…幼児期に少女の足に包帯をまき成長を止める中国(漢族)の風習

## リスタート

ゴードン・コーマン／著 千葉茂樹／訳 あすなろ書房



屋根から落ちて記憶を失ったチェースは、自分が乱暴者だったことを忘れ、真面目な性格に変わっていた。学校では悪友が「また悪ふざけをしようぜ」と誘い、他の生徒は怖がって避けていく。自分は一体何をしでかしたのか。

そんな中、いまだチェースを恨むショシャーナとクラブ活動をするようになった。二人で訪れた老人施設で、チェースは驚愕の過去を徐々に思い出していく。

## 星くずクライミング

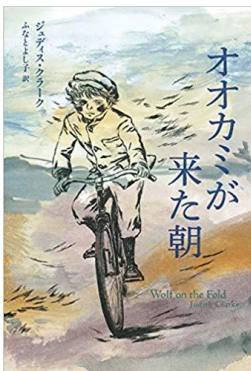
樫崎茜／作 杉山巧／画 くもん出版

突起を手がかりに壁を登っていく、スポーツクライミング。あかりは大会で初優勝を逃して以来、なかなか再開する気持ちになれなかった。久しぶりに行ったジムで、あかりは目が見えないクライマーに突起の場所を指示することになったが、的確な言葉が出てこない。指示される側の昂はいらだち、結局〈パラスポーツ〉は健常者の偽善だと言い放つ。後日、あかりは突起を星座に例えることを思いついた。



## オオカミが来た朝

ジュディス・クラーク／著 ふなとよし子／訳 福音館書店



1935年、オーストラリア。父が死んだケニーは、14歳にして家族を養わなくてはならなくなった。学校を辞め、仕事を探しに行く朝、あまりの寒さに道ばたのたき火に近寄ったケニーは見知らぬ男に捕まってしまう。その危機から脱出できたのは、大嫌いだった詩の授業のおかげだった。

ケニーの娘たち、孫たち、ひ孫たちの四世代それぞれのエピソードをえがく。

## スアレス一家は、今日もにぎやか

メグ・メディナ／著 橋本恵／訳 あすなろ書房



移民でアメリカにやってきたスアレス一家。新しい自転車を買うのもままならないが、家族で助け合っている。中学生のメルシは、クラスでボスの存在のエドナに何かというといびられていたが、何でも相談してきた祖父は、最近物忘れが多く頼りにならない。

学園祭前日、祖母が作ってくれたコスプレ衣装を壊されるという事件が起きた。エドナが怪しいが証拠がない。

## その声は、長い旅をした

中澤晶子／著 ささめやゆき／装画・カット・地図 国土社

昔、長崎ではキリシタン大名によってローマに使節団が派遣された。一行には、ローマ教皇に「歌」を捧げようと下働きのコタロウも加わっていた。3年後、ようやくローマに着いたコタロウは、教皇への目通りを禁じられる。

時は流れ、現代の少年合唱団で活動する開<sup>かい</sup>は、長崎出身の翔平とある森に出かけた。キリシタン処刑の伝説がある森で、二人はこの世のものとは思えぬ歌声を耳にする。



## 明日をさがす旅 故郷を追われた子どもたち

アラン・グラッツ／作 さくまゆみこ／訳 福音館書店



1939年、ユダヤ人のヨーゼフ一家はナチスから迫害され故郷のベルリンを出て船でキューバに向かう。ところが上陸を目前にしてキューバ政府は受け入れを拒否した。錯乱<sup>さくらん</sup>して海に飛び込んだ父だけが助けられ、一家は危険なヨーロッパに戻ることを迫られる。1994年のキューバ、そして2015年のシリアからも命を守るため故郷を脱出する家族たちがいた。やがてこの3家族の物語が交差する。